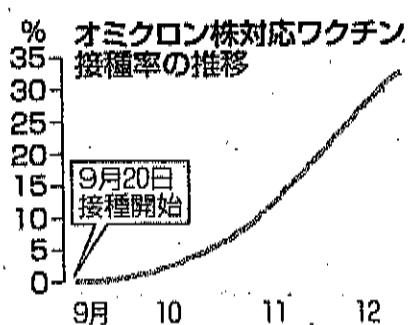


オミクロン対応低迷

ワクチン接種率32% 感染、死者増懸念



リスクの高い高齢者でも54・3%と伸び悩んでいる。年末年始の感染拡大を防ぐため、政府は年内に希望者への接種完了を目指しているが、専門家は「今の接種率は不十分」としており、さらに感染者や死者が増えている懸念が強まっている。

【28面に関連記事】
終わりのないワクチン接種に対する「接種疲れ」や、副作用への懸念、有効性を示すデータが当初少なかつた

ミクロン株に対応した新ワクチンの接種率が、開始から24日までの3カ月余りで全人口の32・5%、重症化リスクの高い高齢者でも54・3%と伸び悩んでいる。

新型コロナウイルスのオミクロン株に対応した新ワクチンはオミクロン株に対して従来ワクチンを

た」となどが低迷の原因とみられる。

新ワクチンはオミクロン株に対して従来ワクチンを上回る効果が期待され、政府は流行「第8波」に備えた対策の柱として9月20日に接種を始めた。

当初は、以前に流行したオミクロン株の「BA・1」対応の製品しかなかったことなどから、接種控えが起きたが、BA・5対応品が投入された10月には1

日当たりの接種回数が増加。11月下旬には100万回を達成した。ただ政府が12月23日に公表したデータによると、接種率は32・5%にとどまり、3回目の接種率67・5%の半分以下だ。年代別では、19歳未満で20代が14・7%、12歳未満が16・4%、30代が18・1%と若い世代で低いのが目立つ。

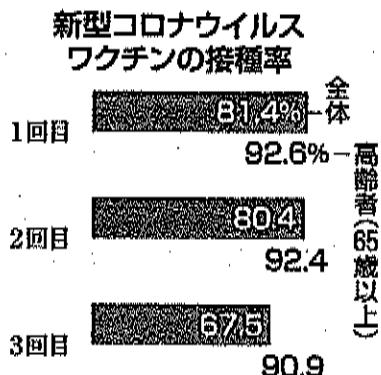
一方で感染者数は10月中旬から増加傾向が続いている、12月21日には約4カ月

ぶりに新規報告数が20万人に達した。死者数は23日に370人を超えた過去最多を更新した。

病床使用率も上昇傾向だ。内閣官房の23日発表の最新データでは、31都府県で、医療の逼迫の自安となる「50%以上」となった。うち滋賀と神奈川では80%を超えた。

接種率が今後の流行被害の規模を左右すると考えられる」とから、政府は年明け以降も接種を継続する方針。特に死リスクの高い高齢者の接種率向上を図る考え方。1~3回目で高齢者はいずれも90%を超えており、この水準に近づけることが重要になる。

オミクロン対応ワクチン低迷



- ・9月20日開始
- ・2回接種を完了した12歳以上の人人が対象
- ・接種間隔は少なくとも3カ月

*23日公表の政府データに基づく。
3回目には一部オミクロン株対応ワクチンも含む

新型コロナウイルスのオミクロン株に対応した新ワクチンの接種率が、低水準にとどまっています。ワクチン事業の長期化が「接種疲れ」につながり、関心が薄れたことなどが織合したところです。人の往来が増えた年末年始に向け、政府は接種の促進を感染対策の切り札に据え、自治体も年の瀬に追い込みをかけたが、流行「第8波」が収束する気配は見えない。

【1面と本宮】

予算長期化 接種疲れに

▽武器

「対策は充実してきたが、感染を防ぐための最大の武器はワクチン」。政府関係者は接種の重要性を力強く指摘する。

政府と自治体は9月20日に新ワクチン接種を始めて1カ月程度で、目標の1日100万回を大幅に上回る約168万回打てる体制を整備した。接種間隔も少なくとも3カ月から3カ月に短縮するなど、新ワクチンを打ちやすい環境を整えた。

準備を急いで背景には、「これまで帰省や忘年会、新年会など人と交流する機会が増える年末年始に感染の波が押し寄せた」との声が聞こえた。

松野博一官房長官は23日の記者会見で「G7（先進7カ国）各國の接種率を比較すると日本が最も高い。接種が進んでいる」と強調した。

▽関心低下

しかし新ワクチンの接種は、開始から3カ月が経過しても全人口の32・5%で、2回を打ち終えた人の80・4%、3回目の67・5%を大きく下回った。回数を重ねるのに接種率は低下しており、スタートから間もなく2年が経過する中で「ワクチンに対する関心はどんどん低

し寄せられた苦い経験があ

る。中国地方の自治体担当者は「12月に入ると、自治体はさらに推進策に取り組んだ」。

（筆者）。

群馬県は県内の大学、商業施設を巡回するバスで接種を始めた。「伸び悩む若者向けに発案した」（担当者）。宮城県は東北大と連携し、JR仙台駅近くに夜間接種センターを設置。中旬からは「田舎」での接種規模を拡充し、担当者は「予約枠の定員は埋まっている。帰省や受験シーズンを迎える人もいるので、多くの人に受けたまし」と話す。東京など首都圏の1都3県は21日に「年内接種を」と共同メッセージで呼びかけた。

【第8波】に入り、1日当たりの感染者数は8月下旬以来の20万人を超えて、今年夏の「第7波」で記録した過去最多の水準に迫っている。日本医師会の幹部は「感染が徐々に増えながら年末年始を迎えると思う」と警戒感を示す。インフルエンザとの同時流行も懸念材料だ。

厚生労働省は「ワクチンで免疫をつけた方が、オミクロン対応ワクチンを重症化率が高い高齢者には進めていい必要がある」と訴えた。

体制整備も振るわぬ切り札

12月に入ると、自治体はさらに推進策に取り組んだ。

群馬県は県内の大学、商業施設を巡回するバスで接種を始めた。「伸び悩む若者向けに発案した」（担当者）。宮城県は東北大と連携し、JR仙台駅近くに夜間接種センターを設置。中旬からは「田舎」での接種規模を拡充し、担当者は「予約枠の定員は埋まっている。帰省や受験シーズンを迎える人もいるので、多くの人に受けたまし」と話す。東京など首都圏の1都3県は21日に「年内接種を」と共同メッセージで呼びかけた。

【第8波】に入り、1日当たりの感染者数は8月下旬以来の20万人を超えて、今年夏の「第7波」で記録した過去最多の水準に迫っている。日本医師会の幹部は「感染が徐々に増えながら年末年始を迎えると思う」と警戒感を示す。インフルエンザとの同時流行も懸念材料だ。

厚生労働省は「ワクチンで免疫をつけた方が、オミクロン対応ワクチンを重症化率が高い高齢者には進めていい必要がある」と訴えた。